

意こころに可かなりり（良りょう寛かん）

慾よく 無なければ 一切いっさい 足たり

求もとむる 有あれば 万ばん事じ 窮きゆうす

淡たん菜さい 饑うえを 療いす 可べく

衲のう衣い 聊いささか 躬みに 纏まとう

独ひとり 往ゆいて 麋びろく鹿くを 伴ともとし

高こう歌かして 村そん童どうに 和わす

耳みみを 洗あろう 巖がん下かの 水みず

意こころに 可かなり 嶺れい上じょうの 松まつ

無慾一切足 有求萬事窮

淡菜可療饑 衲衣聊纏躬

獨往伴麋鹿 高歌和村童

洗耳巖下水 可意嶺上松

解説 良寛は故郷の越後出雲崎を出て、全国を行脚したあと、ふたたび、故郷の地を踏み、五合庵に住んだ。この頃の良寛は無欲悟淡（てんたん）、山水を賞し、しむ生活だった。この詩は、その頃の心境を詠じたもの。

語釈 ※可意 心に満足、こころよい、の意。 ※慾 人間の欲望。 ※淡菜 淡白な野菜。 ※衲衣 衲はごろも。また、僧の自称。僧の衣類を表わす。 ※聊 ますます、の意。 ※独住 他にさまたげられず、自由に行く。 ※麋鹿 におおしかと鹿と。 ※高歌 声高らかに歌をうたうこと。 ※村童 村の子供たち。 ※洗耳 中国古代の伝説上の人物。堯帝が位を譲ろうと言うと、汚れたことを聞いたと、潁水耳を洗い、箕山に隠れた故事を引用した。 ※巖下水 巖の泉から流れ出る清らかな水。 ※嶺上松 嶺の上にそびえる松。

通釈 欲がなければ、全てが足りて不足ということはない。求めようとするから万事極まるのである。あつさりした野菜は、飢えを癒やすことが出来、衣でも身にまとうに足りる。独り、麋鹿をつれながら、自然にひたり、また、村の子供たちと高らかに声をあげて歌いあう。全て十分に楽しいことばかりである。岩の下には清らかな水が流れていて、俗事のけがれを洗うことが出来るし、嶺の上の松が風に揺れる音も、わが心にかなうように、清々しく、心地よく聞こえてくる。